

寄稿文

ロンドンオリンピック・パラリンピック計画 における理念の重要性

秋山 哲男

中央大学 研究開発機構 教授
(日本福祉のまちづくり学会会長)



目先の利益と計画理念

私たちの日常生活では、毎日の新聞広告を見る人は安売りの情報（品物・時間・店）を知ることができ、結果として他の人より得をする。「ぐるなび」を使う人も使わない人に比べると安く飲める。私も、飛行機に乗るときチケットを早く買えば割引があり、宿泊と一緒にさらに安くなる。これらは、個人の努力によって得をするという目先の利益の典型例である。しかし他人に迷惑は掛からない。このような目先の利益の追求は経済学的な面で現代生活に深く入り込んでいる。このような行動とは真逆の利他的行動（利他的利益）は、自分には得にならないが、他人のためになる行動である。単純なことでは電車やバスで席を譲るなどの小さな親切から、高齢者や障害者のために道路や駅などをバリアフリーにする等の計画に賛成することも利他的行動である。例えば、ごみを捨てないで、列に並びましょう、たばこをポイ捨てしないで、など公的な機関が簡単な利他的行動を提案するが、なかなかうまくいかないことが多い。このことは自分にとって楽なことを優先する目先の利益を追い求める人が少なくないからであろう。この目先の利益の対極にあるのが将来のあるべき姿を示す基本的考え方や理念である。日本では、多くの人ができないと思っているので理念がお題目と化している場合が多い。例えば、「コンパクトシティ」と計画に書いた自治体の職員の9割が、コンパクトシティなんてとてもできないと思っている。多くの素晴らしい計画もなかなか進まないのが日本人の「最初から諦めている心」にあるかもしれない。

理念を大事にする国

北欧の小さな国（デンマーク・スウェーデン）が、人類の進歩と発展のために考えた理念であるノーマライゼイション（1950年頃）が今でも使われている。またブラジルのリオデジャネイロの会議で提案されたサステイナビリティ（持続可能な開発、1992年）や米国のユニバーサルデザイン（誰にでも利用できるデザイン、1985年頃）も、我が国の政策に大きな影響を与えている考え方だ。

今年の6月にロンドンの調査において、オリンピック・パラリンピックを支えた3つの理念を初めて知った。その理念とは、建設した施設をその後も継続的に使い続けるという「遺産（Legacy）」、環境負荷を軽減する「サステイナビリティ（Sustainability）」、すべての人を孤立させず社会の中に包み込むという「インクルージョン（Inclusion）」である。

「レガシー」が最も顕在化している地区は、オリンピックパークの整備を適用した、貧困度が高いストラトフォード周辺のエリアの地域再生とその後の活用である。2008 年の「レガシー行動計画」に基づき、五輪開催の 2012 年を一つの通過点として考え、中長期の視点に基づき整備を可能な限り既存施設の利用を前提に、仮に新規に建設する必要がある場合には、五輪後の利用方法とそのコストを十分に検討した。さらに施設整備の 3 つの考え方、「恒久施設」とすべきか、「仮設施設」とすべきか、「中間的な施設（五輪後に改修、移築した上で利用）」とすべきかを判断した。このことは、オリンピック・パラリンピックは、一つのインフラ整備の通過点で、将来も利用し続けることを前提で考えていることだ。

「インクルージョン」は、社会の中に「包摂」する、社会と「一体性」を保つ、などといった意味で、障害者であるか否か、社会的な立場、年齢、宗教、民族など様々な違いを乗り越え、社会的な一体感を高めていこうとする取組みである。ハード面では、パーク内及び施設のバリアフリー化の取組みが重要であった。またオリンピック施設整備庁によってインクルージブ設計基準 (Inclusive Design Standards) を定めた。具体的な内容は以下の 2 つである。

一つは雇用に関するインクルージョンである。これは、建設労働者の雇用に関する取組みも含まれるパーク内の建設工事においては地元雇用や失業者雇用を積極的に推進し建設労働者のうち雇用目標が次のように設定された。25%は東ロンドンの住民から、10%は失業者から、25%はマイノリティ住民から、5%は女性から、3%は障害者から、3%は見習い工からである。

もう一つは公園整備である。パーク内のインクルージョンについては、パーク整備に当たっては宗教上の配慮も相当行っており、個室型の礼拝施設の設置、イスラム教徒への配慮から、メッカへの眺望軸をできる限り確保し、メッカの方角に正対する形でトイレを設置しないといった工夫も見られる。パーク内の通路の傾斜は 1/60 以下、50m ごとにベンチが設置、施設内には車椅子用の観戦スペースや更衣室も準備された。聴覚障害者のためのオーディオ設備の貸出し、盲導犬のためのトイレも設置された。鉄道駅など交通インフラにおいても、段差の解消、エレベーターの設置といったバリアフリー工事が積極的に行われた。

サステイナビリティについては、ロンドン五輪をかつてないほど環境に配慮した大会にしようとし、汚染土壌の処理、緑地の整備、生物多様性の確保、発生する二酸化炭素の削減、省エネ建築物の整備、建設廃棄物のリサイクルなど、幅広い項目について環境対策を行い、公園整備や生物多様性を確保している。詳細は割愛する。

総括すると、ロンドンオリンピック・パラリンピックは短期的な効果を狙うことだけでなく、長期の効果も合わせて考えていたことである。特に長期の効果をもたらす整備は、ゆるぎない理念が必要であるとともに、オリンピック・パラリンピックの準備で最も感心したのは様々な情報を関係者が共有して進めていったことである。